

序章 要旨にかえて

タイトルにある〈隣人〉は、第二章・第三章のキーワードであるが、このキーワードは、やはり、二〇一一年の東日本大震災へと遡る。未曾有の震災に直面し、その後、なかなか進まぬ復興にともなって、地域が分断され、人間関係に深い亀裂が生じるなか、多くの文学研究者が文学研究を省みたように、「文学」の対社会的な意味を問い直さざるを得なかった。そのときの思いや考えが、論考へ直接は表現されていないものの、その論理を深層で支えている。現在、立正大学のデリバリーカレッジで、地方の文化センターへ出かけて行って講演をする機会があるが、そのとき、第二章と第三章とのエッセンスだけを話させていただくことがある。はじめて寺山修司についての話を聴く方々にも好意的に受け止めてもらえるのは、その論理展開に隠れている、震災時に問い直した、筆者の文学への思いの方ではないだろうか。

論考のタイトルでときどき見かける、例えば「夏目漱石と森鷗外」「川端康成と横光利一」や「太宰治の芥川龍之介」「俵万智の与謝野晶子」などにおいては、そのタイトルのなかに挿まれた助詞「と」や「の」に、考察のポイントが示されているように思う。助詞「と」が抱える、並列や対立の視点、また助詞「の」が抱える、所属や所有の視点がそうである。

これは各章のタイトルに用いた「と」「の」の助詞が、同様な意味で、考察の視点の表意であり、さらに、寺山修司のようにジャンルを横断して創作活動を行った芸術家を対象とする場合の、分析方法の表明としても意図した。寺山修司の創作には、ジャンル間の境界から眺めないと指摘できない問題が多々あると考えるならば、〈隣人〉というキーワードは、人の意味にとどまるものではない。

Ⅱ 野田秀樹への入口」Ⅲ 平田オリザへの入口」でまとめた論考も同様の視点で貫かれており、そこ

では、野田秀樹や平田オリザの〈隣人〉として活躍した他の作家たちの問題意識を跨いで考察を進めている。そして、その視点を一つの入口として、野田秀樹や平田オリザが構築した世界へと足を踏み入れてみてはどうかといった提示にもなると考え、入口と表現した。

先に、キーワードの〈隣人〉を、分析方法にも関係してくるため、人の意味にとどまるものではないと述べたが、第三章の考察においては、〈隣人〉とは誰なのかといった問いが立てられると考えている。その上で、文学的な手続きにおいてしか解明できないとも考えている。その考察では〈隣人〉という用語が、長い歴史において抱えてきた重層的なイメージを必要とし、隣接といった機能的な意味だけでは、表現が充分ではないと思えたので、あえて〈隣人〉の表現を選択した。

以下、各章の簡単な要約を示す。

I 寺山修司への入口

第一章 ライトミステリ小説『ビブリア古書堂の事件手帖5 榎子さんと繋がりの時』(三上延 著)で、

寺山修司の第一作品集『われに五月を』が取り上げられている。物語では、寺山直筆の草稿原稿が、その価値のわからない者によって消され、上書きされるといふ事件が起きる。様々な種類の事件があるなか、作者の三上延が選んだ「消して上書きする」というポイントは、実は寺山修司を理解するのに最も大事な視点である。その理由とともに、小説の世界だけではなく、学術研究においても同様な謎があることを示し、その謎をミステリ小説と同じように解き明かしてみる。

第二章 寺山の代表歌「マツチ擦る―」一首をめぐっての考察である。まず、高校国語教科書を例に、教室で

はどのように読解されているかを確認し、その後、著名人たちによる代表的な鑑賞を批判検討する。また、初出から何度も再掲載されるこの短歌の変遷をおさえ、寺山がよく用いた技法「コラージュ」を問い直しながら、この一首がどのように意味を変えていったかを論じる。

第三章 第二章の問いを受けての考察。ここでは、「マツチ擦るー」一首が、「コラージュ」ではなく、実体験によって制作されたという鑑賞文を取り上げる。なぜこのような鑑賞文が書かれたのか、その謎を寺山の著作とその著述方法から解明し、この一首が再掲載されるときに起きた同時代の事件を引き込んで、疎外された者への、寺山の眼差しを意味づける。

第四章 寺山は歌人としてデビューしながら、ラジオドラマや映画のシナリオなど様々なジャンルを越境しながら創作活動をした。国際的な評価を得るきっかけは、劇団「演劇実験室『天井桟敷』」の活動である。だが、劇団「演劇実験室『天井桟敷』」の前に、詩劇グループ「鳥」の活動があったことが、現在の研究状況では忘れられてはしないか。そのメンバーの一人であった詩人の嶋岡晨を取り上げ、寺山との間で行われた前衛短歌論争の〈様式論争〉を問い直す。

第五章 第四章を受けての考察。〈様式論争〉は、短歌における重要な問いを抱えこみながらも、両者の議論が噛み合わないまま終了する。ところが、その後、二人は他に二名を加えて詩劇グループ「鳥」を協同で立ち上げる。このとき上演された寺山と嶋岡との作品は、〈様式論争〉の第二戦の様相を呈したのではないか。二人の作品を比較分析することによって、お互いが持つ詩精神（ポエジー）の異質性を炙り出す。

第六章 寺山は作品を、よく「コラージュ」によって制作した。その寺山の作品を「コラージュ」して制作したような短歌がある。縊死した学生歌人・岸上大作の「意志表示ー」一首だ、この一首をめぐっての考察である。歌句「声なきこえ」をポイントに、一九六〇年代の時代の問題と、その時代に翻弄される一人の学生の思いを、岸上の短歌から考える。

第七章 第六章を受けての考察。岸上大作は評論「寺山修司論」をしたためる。寺山を批判する筆は、若書きゆえ、論法にはころびがみえるが、それがかえって岸上の問題意識を前面に押し出す。その論理展開には〈様式論争〉での嶋岡晨の寺山批判の影響が大きいのではないか。岸上が〈様式論争〉をどのように読み、また、どのように読めなかったのかを論じる。

II 野田秀樹への入口

第八章 寺山修司と野田秀樹との接点を論じる。野田秀樹の劇団「夢の遊眠社」の公演を晩年の寺山は観ており、その批評を書いている。その演劇批評をきっかけに、ふたりに共通する「少年」をキーワードとして、寺山修司の短歌一首を鑑賞する。

第九章 デビュー間もない頃の野田秀樹は、坂口安吾の生まれ変わりを自称していた。その安吾の小説「桜の森の満開の下」の演劇化をめぐる論考。安吾の小説では〈首遊び〉のシーンが、常に考察の対象となってきた。さまざまな演劇作品における〈首遊び〉のシーンの演出から、文学研究とは異なる読解の可能性を探る。

第十章 野田秀樹は、安吾の「桜の森の満開の下」と小説「夜長姫と耳男」と安吾のいくつかの評論を下敷きにして演劇「贋作 桜の森の満開の下」を制作する。一九八九年の、その舞台に同時代の問題を指摘しながら、野田秀樹が坂口安吾から継承したと思われる問題意識を問い直す。

第十一章 学生時代に筆者自らが舞台化した小説「桜の森の満開の下」の脚色と演出をとりあげ、小説に登場する「女」と「鬼」との関係を、〈面〉を中心にして考察する。小道具としての〈面〉の表現の可能性から、安吾の小説がかかえる「主体」の問題を考える。

第十二章 坂口安吾の師である牧野信一の小説を考察する。牧野が抱えた文学的問題を〈レンズ〉と〈鏡〉と

から分析したあと、弟子の坂口安吾のなかでどのようなように問い直されたかを考える。安吾の「ファルス」や、小説「桜の森の満開の下」の「虚空」につらなる文学的問題ではないだろうか。

Ⅲ 平田オリザへの入口

第十三章 一九六〇年前後から始まる小劇場運動において、寺山修司は第一世代に分類される。第二世代の代表的な存在だった、つかこうへいをはさみ、野田秀樹は第三世代、平田オリザは第四世代として、演劇史上では括られることが多い。平田オリザが言及した寺山修司のエッセイをきっかけに、「アングラ演劇」と評された寺山が、前世代の何を批判して演劇を始めたのか、また、「静かな演劇」と評された平田が、何を批判して演劇活動をしているのか、その演劇論を比較しながら、演劇における「近代リアリズム」の問題を考える。

現在、平田オリザは工学者の石黒浩と組んで「ロボット演劇」を上演し続けているが、「ロボット演劇」での問題は、第十二章の牧野信一の〈鏡〉や〈レンズ〉、第九章から第十一章にかけての安吾の〈肉体〉、寺山修司に関する章段で考察した〈私〉の問題に繋がることだと考えている。関係論から存在論への問い直し、その問題を考えるのに、寺山修司の問題意識を、今一度振り返ってみなければならぬであろう。これが今後の研究課題である。

